

2018年01月06日 00:27

国宝修復に高岡の技 奈良・薬師寺東塔の「相輪」、銅器振興組合が受注

伝統工芸高岡銅器振興協同組合（梶原壽治理事長）が、奈良・薬師寺の東塔（国宝）の解体修理事業に加わるようになった。最上部に取り付けられている金属製飾り「相輪（そうりん）」の一部の修復・補修を奈良県から請け負い、3月末までに仕上げる。梶原理事長は「高岡の技が国宝の修復に生かされる。職人の力を結集したい」と意気込んでいる。

（高岡支社編集部・熊谷浩二）

薬師寺は680年、天武天皇が藤原京に創建。平城京への遷都に伴い、718年に現在地に移転した。東塔は約1300年前の創建当時から残る唯一の建物で、高さ約34メートル。2009年から奈良県によって解体修理が進められている。



伝統工芸高岡銅器振興協同組合は高岡銅器の技術力をPRする手段として文化財の修復事業に注目。法隆寺の釈迦（しゃか）三尊像（国宝）の再現プロジェクトにも加わり、3Dプリンターで作った原型を基に仏像と大光背（だいこうはい）を鋳造した。再現像は昨年、高岡市と東京芸術大で一般公開された。

今回修復する相輪は高さ約10メートル。同組合は上部にある宝珠と竜舎（りゅうしゃ）、水煙の下部にある受け具の擦管（さっかん）、九つある九輪（くりん）の一つを作る。劣化して割れた金具の補修も行う。原型は3Dプリンターなどを活用して作る。

当時と同じ銅合金の成分にするため、配合率は銅が92%と高く、スズは2・5%。さらに微量のヒ素を加えるのが特徴という。今回、最も難しいとされるのが着色などの仕上げ工程。現存する部材と組み合わせるため、1300年間の経年変化による色や質感を再現する必要がある。梶原理事長は「職人技の引き出しを全て使い、国宝として誇れる仕事をしたい」と気合を入れる。

同組合は昨年、奈良県の入札業者の認定資格を取得。12月21日に落札の通知を受けた。組合と

して国宝の修復に携わるのは初めて。今月中旬から原型作りを始め、2月上旬に鋳造、3月中旬から仕上げに取り掛かる。



マイスクラップに登録する